第二菎蒻本

泉鏡花

一

雪の夜路（よみち）の、人影もない真白（まっしろ）な中を、矢来の奥の男世帯へ出先から帰った目に、狭い二階の六畳敷、机の傍（わき）なる置炬燵（おきごたつ）に、肩まで入って待っていたのが、するりと起直った、逢いに来た婦（おんな）の一重々々（ひとえひとえ）、燃立つような長襦袢（ながじゅばん）ばかりだった姿は、思い懸けずもまた類（たぐい）なく美しいものであった。

膚（はだ）を蔽（おお）うに紅（くれない）のみで、人の家に澄まし振（ふり）。長年連添って、気心も、羽織も、帯も打解けたものにだってちょっとあるまい。

世間も構わず傍若無人、と思わねばならないのに、俊吉は別に怪（あやし）まなかった。それは、懐しい、恋しい情が昂（あが）って、路々の雪礫（ゆきつぶて）に目が眩（くら）んだ次第ではない。

——逢いに来た——と報知（しらせ）を聞いて、同じ牛込、北町の友達の家（うち）から、番傘を傾け傾け、雪を凌（しの）いで帰る途中も、その婦（おんな）を思うと、鎖（とざ）した町家（まちや）の隙間洩（も）る、仄（ほのか）な燈火（あかり）よりも颯（さっ）と濃い緋（ひ）の色を、酒井の屋敷の森越に、ちらちらと浮いつ沈みつ、幻のように視（み）たのであるから。

当夜は、北町の友達のその座敷に、五人ばかりの知己（ちかづき）が集って、袋廻しの運座があった。雪を当込（あてこ）んだ

催（もよおし）ではなかったけれども、黄昏（たそがれ）が白くなって、さて小留（こや）みもなく降頻（ふりしき）る。戸外（おもて）の寂寞（さみ）しいほど燈（ともしび）の興は湧（わ）いて、血気の連中、借銭ばかりにして女房なし、河豚（ふぐ）も鉄砲も、持って来い。……勢（いきおい）はさりながら、もの凄（すご）いくらい庭の雨戸を圧して、ばさばさ鉢前の南天まで押寄せた敵に対して、驚破（すわ）や、蒐（かか）れと、木戸を開いて切って出（い）づべき矢種はないので、逸雄（はやりお）の面々歯噛（はがみ）をしながら、ひたすら籠城（ろうじょう）の軍議一決。

そのつもりで、――千破矢（ちはや）の雨滴（あまだれ）という用意は無い――水の手の燗徳利（かんどくり）も宵からは傾けず。追加の雪の題が、一つ増しただけ互選のおくれた初夜過ぎに、はじ

めて約束の酒となった。が、筆のついでに、座中の各自（てんで）が、好（すき）、悪（きらい）、その季節、花の名、声、人、鳥、虫などを書きしるして、揃った処で、一（ひとつ）……何某（なにがし）……好（すき）なものは、美人。

「遠慮は要らないよ。」

悪（にく）むものは毛虫、と高らかに読上げよう、という事になる。

箇条の中に、最好、としたのがあり。

「この最好というのは。」

「当人が何より、いい事、嬉しい事、好な事を引（ひっ）くるめてちょっと金麩羅（きんぷら）にして頬張るんだ。」

その標目(みだし)の下へ、何よりも先に＝＝待人来る(きた)＝＝と……姓を吉岡と云う俊吉が書込んだ時であった。

襖(ふすま)をすうと開けて、当家の女中が、

「吉岡さん、お宅からお使(つかい)でございます。」

「内から……」

「へい、女中さんがお見えなさいました。」

「何てって？」

「ちょっと、お顔をツて、お玄関にお待ちでございます。」

「何だろう。」と俊吉はフトものを深く考えさせられたのである。

お互に用の有りそうな連中は、大概この座に居合わす。出先へこうした急使の覚えはいささかもないので、急な病気、と老人（としより）を持つ胸に応（こた）えた。

「敵の間諜（まわしもの）じゃないか。」と座の右に居て、猪口（ちょく）を持ちながら、膝の上で、箇条を拾っていた当家の主人が、ト俯向（うつむ）いたままで云った。

「まさか。」

と眴（みまわ）すと、ずらりと車座が残らず顔を見た時、燈（あかり）の色が颯（さっ）と白く、雪が降込んだように俊吉の目に映った。

二

「ちょっと、失礼する。」で、引返して行（ゆ）く女中のあとへついて、出しなに、真中（まんなか）の襖（ふすま）を閉める、と降積（ふりつも）る雪の夜（よ）は、一重（ひとえ）の隔（へだて）も音が沈んで、酒の座は摺退（すりの）いたように、ずッと遠くなる……風の寒い、冷い縁側を、するする通って、来馴（きな）れた家（うち）で戸惑いもせず、暗がりの座敷を一間、壁際を抜けると、次が玄関。

取次いだ女中は、もう台所へ出て、鍋（なべ）を上る湯気の影。

そこから彗星（ほうきぼし）のような燈（あかり）の末が、半ば開けかけた襖越、仄（ほのか）に玄関の畳へさす、と見ると、沓脱（くつぬぎ）の三和土（たたき）を間（あい）に、暗い格子戸にぴたりと附着（くッつ）いて、横向きに立って［＃「立って」は底本では「立つて」］いたのは、俊吉の世帯に年増（としま）の女中で。

　二月ばかり給金の借（かり）のあるのが、同じく三月ほど滞（とどこお）った、差配で借りた屋号の黒い提灯（ちょうちん）を袖に引着けて待設ける。が、この提灯を貸したほどなら、夜中に店立（たなだ）てをくわせもしまい。

「おい、……何だ、何だ。」と框（かまち）まで。

「あ、旦那様。」

と小腰を屈(かが)めたが、向直って、

「ちょっと、どうぞ。」と沈めて云う。

余り要ありそうなのに、急(せ)き心に声が苛立(いらだ)って、

「入れよ、こっちへ。」

「傘も何も、あの、雪で一杯でございますから。皆様のお穿(はき)ものが、」

成程、暴風雨(あらし)の舟が遁込(にげこ)んださながらの下駄の並び方。雪が落ちると台なしという遠慮であろう。

「それに、……あの、ちょっとどうぞ。」

「何だよ。」とまだ強く言いながら、俊吉は、台所から燈(あかり)の透く、その正面の襖を閉めた。

真暗（まっくら）になる土間の其方（そなた）に、雪の袖なる提灯一つ、夜を遥（はるか）な思（おもい）がする。

労（ねぎ）らい心で、

「そんなに、降るのか。」といいいい土間へ。

「もう、貴方（あなた）、足駄（あしだ）が沈みますほどでございます。」

聞きも果てずに格子に着いて、

「何だ。」

「お客様でございまして。」と少し顔を退（ど）けながら、せいせい云う……道を急いだ呼吸（いき）づかい、提灯の灯の額際が、汗ばむばかり、てらてらとして赤い。

「誰だ。」

「あの、宮本様とおっしゃいます。」
「宮本……どんな男だ。」
時に、傘（からかさ）を横にはずす、とバサリという、片手に提灯を持直すと、雪がちらちらと軒を潜（くぐ）った。
「いいえ、御婦人の方でいらっしゃいます。」
「婦（おんな）が？」
「はい。」
「婦だ……待ってるのか。」
「ええ、是非お目にかかりとうございますって。」
「はてな、……」
とのみで、俊吉はちょっと黙った。

女中は、その太った軀を揉みこなすように、も一つ腰を屈めながら、

「それに、あの、お出先へお迎いに行くのなら、御朋輩の方に、御自分の事をお知らせ申さないように、内証でと、くれぐれも、お託けでございましたものですから。」

「変だな、おかしいな、どこのものだか言ったかい。」

「ええ、御遠方。」

「遠い処か。」

「深川からとおっしゃいました。」

「ああ、襟巻なんか取らんでも可い。……お帰り。」

女中はポカンとして膨れた手袋の手を、提灯の柄ごと唇へ当てて、

「どういたしましょう。」

「……可(よ)し、直ぐ帰る。」

座敷に引返(ひっかえ)そうとして、かたりと土間の下駄を踏んだが、ちょっと留まって、

「どんな風采(ふう)をしている。」と声を密(ひそ)めると。

「あの真紅(まっか)なお襦袢(じゅばん)で、お跣足(はだし)で。」

三

「第一、それが目に着いたんだ、夜だし、……雪が白いから。」

俊吉は、外套(がいとう)も無(な)しに、番傘で、帰途(かえり)を急ぐ中(うち)に、雪で足許(あしもと)も辿々(たどたど)しいに附けても、心も空も真白(まっしろ)に跣足(はだし)というのが身に染みる。

——しかし可訝(おか)しい、いや可訝しくはない、けれども妙だ、——あの時、そうだ、久しぶりに逢って、その逢ったのが、その晩ぎり……またわかれになった。

——しかもあの時、思いがけない、うっかりした仕損(しそこな)いで、あの、お染(そめ)の、あの体(からだ)に、胸から膝へ血を浴びせるようなことをした。——

眴（みまわ）せば、我が袖も、他（ひと）の垣根も雪である。

――去年の夏、たしか八月の末と思う、――

その事のあった時、お染は白地明石（あかし）に藍（あい）で子持縞（こもちじま）の羅（うすもの）を着ていたから、場所と云い、境遇も、年増の身で、小さな芸妓屋（げいしゃや）に丸抱えという、可哀（あわれ）な流（ながれ）にしがらみを掛けた袖も、花に、もみじに、霜にさえその時々の色を染める。九月と云えば、暗いのも、明（あか）るいのも、そこいら、……御神燈並（なみ）に、絽（ろ）なり、お召（めし）なり単衣（ひとえもの）に衣更（きか）える筈（はず）。……しょぼしょぼ雨で涼しかったが葉月の声を聞く前だった。それに、浅草へ出（で）勤て、お染はまだ間もなかった頃で、どこにも馴染（なじみ）は無いらしく、

連立って行（ゆ）く先を、内証で、抱主（かかえぬし）の蔦家（つたや）の女房とひそひそと囁（ささや）いて、その指図に任かせた始末。
披露（ひろめ）の日は、目も眩（くら）むように暑かったと云った。

主人が主人で、出先に余り数はなし、母衣（ほろ）を掛けて護謨輪（ゴムわ）を軋（きし）らせるほど、光った御茶屋には得意もないので、洋傘（こうもり）をさして、抱主がついて、細かく、せっせと近所の待合小料理屋を刻んで廻った。

「かさかさして、えんえんえん、という形なの、泣かないばかりですわ。私もう、嬰児（あかんぼ）に生れかわった気になったんですけれど、情（なさけ）ないッてなかったわ。

その洋傘（かさ）だって、お前さん、新規な涼しいんじゃな

いでしょう。旅で田舎を持ち歩行(ある)いた、黄色い汚点(しみ)だらけなんじゃありませんか。

そしてどうです、長襦袢たら、まあ、やっぱりこれですもの。」

と包ましやかに、薄藤色の半襟を、面瘦(おもや)せた、が、色の白い頤(おとがい)で圧(おさ)えて云う。

その時、小雨の夜の路地裏の待合で、述懐しつつ、恥らったのが、夕顔の面影ならず、膚(はだえ)を包んだ紅(くれない)であった。

「……この土地じゃ、これでないと不可(いけな)いんだって、主人が是非と云いますもの、出の衣裳だから仕方がな

い。

それで、白足袋でお練（ねり）でしょう。もう五になって真白（まっしろ）でしょう、顔はむらになる……奥山相当で、煤（すす）けた行燈（あんどん）の影へ横向きに手を支（つ）いて、肩で挨拶（あいさつ）をして出るんなら可（い）いけれど、それだって凄（すご）いわね。

真昼間（まっぴるま）でしょう、遣切（やりき）れたもんじゃありゃしない。

冷汗だわ、お前さん、かんかん炎天に照附けられるのと一所で、洋傘（かさ）を持った手が辷（すべ）るんですもの、掌（てのひら）から、」

と二の腕が衝（つ）と白く、且つ白麻の手巾（ハンケチ）で、卜肩をおさえて、熟（じっ）と見た瞼（まぶた）の白露。

――俊吉は、雪の屋敷町の中ほどで、ただ一人。……

……肩袖をはたはたと払った。……払えば、ちらちらと散る、が、夜目にも消えはせず、なお白々(しらじら)と俤立(おもかげた)つ。

四

「この、お前さん手巾(ハンケチ)でさ、洋傘(かさ)の柄を、しっかりと握って歩行(ある)きましたんですよ。

あとへ跟(つ)いて来る女房(おかみ)さんの風俗(ふう)ッたら、御覧なさいなね。人の事を云えた義理じゃないけれど、私よりか塗立って、しょろしょろ裾長(すそなが)か何かで、鬢(びん)をべった

りと出して、黒い目を光らかして、おまけに腕まくりで、まるで、売（うり）ますの口上言いだわね。

察して下さいな。」

と遣瀬（やるせ）なげに、眉をせめて俯目（ふしめ）になったと思うと、まだその上に――気障（きざ）じゃありませんか、駈出（かけだ）しの女形がハイカラ娘の演（す）るように――と洋傘（かさ）を持った風采（なり）を自ら嘲（あざわら）った、その手巾（ハンケチ）を顔に当てて、水髪や葱（しのぶ）の雫（しずく）、縁に風りんのチリリンと鳴る時、芸妓（げいこ）島田を俯向（うつむ）けに膝に突伏（つっぷ）した。

その時、待合の女房が、襖越（ふすまごし）に、長火鉢の処（とこ）で、声を掛けた。

「染ちゃん、お出ばなが。」

俊吉はこれを聞くと、女の肩に掛けていた手が震えた……染ちゃんと云う年紀（とし）ではない。遊女（つとめ）あがりの女をと気がさして、なぜか不思議に、女もともに、侮（あなど）り、軽（かろ）んじ、冷評（ひやか）されたような気がして、悚然（ぞっ）として五体を取って引緊（ひきし）められたまで、極（きま）りの悪い思いをしたのであった。

いわゆる、その（お出ばな）のためであった、女に血を浴びせるような事の起ったのは。

思えば、その女には当夜は云うまでもなく、いつも、いつまでも逢うべきではなかったのである。

はじめ、無理をして廓を出たため、一度、町の橋は渡っても、潮に落行かねばならない羽目で、千葉へ行って芸妓になった。

その土地で、ちょっとした呉服屋に思われたが、若い男が田舎気質の赫と逆上せた深嵌りで、家も店も潰した果が、女房子を四辻へ打棄って、無理算段の足抜きで、女を東京へ連れて遁げると、旅籠住居の気を換える見物の一夜。洲崎の廓へ入った時、ここの大籬の女を俺が、と手折った枝に根を生す、返咲の色を見せる気にもなったし、意気な男で暮したさに、引手茶屋が一軒、不景気で分散して、売物に出たのがあった

のを、届くだけの借金で、とにかく手附ぐらいな処で、話を着けて引受けて稼業をした。

まず引掛（ひっかけ）の昼夜帯が一つ鳴って〆（しま）った姿。わざと短い煙管（きせる）で、真新しい銅壺（どうこ）に並んで、立膝で吹かしながら、雪の素顔で、廓（くるわ）をちらつく影法師を見て思出したか。

——勘定（つけ）をかく、掛（かけ）すずりに袖でかくして参らせ候、——

二年ぶり、打絶えた女の音信（たより）を受取った。けれども俊吉は稼業は何でも、主（ぬし）あるものに、あえて返事もしなかったのである。

〆の形や、雁の翼は勿論、前の前の下宿屋あたりの春秋の空を廻り舞って、二三度、俊吉の今の住居に届いたけれども、疑も嫉妬も無い、かえって、卑怯だ、と自分を罵りながらも逢わずに過した。

朧々の夜も過ぎず、廓は八重桜の盛というのに、女が先へ身を隠した。……櫛巻が褄白く土手の暗がりを忍んで出たろう。

引手茶屋は、ものの半年とも持堪えず、――残った不義理の借金のために、大川を深川から、身を倒に浅草へ流着いた。……手切の髢も中に籠めて、芸妓髷に結った私、千葉の人とは、きれいに分をつけ

参らせ候（そろ）。

そうした手紙を、やがて俊吉が受取ったのは、五重の塔の時鳥（ほととぎす）。奥山の青葉頃。……

雪の森、雪の塀、俊吉は辻へ来た。

五

八月の末だった、その日、俊吉は一人、向島（むこうじま）［＃ルビの「むこうじま」は底本では「むかうじま」］の百花園に行った帰途（かえるさ）、三囲（みめぐり）のあたりから土手へ颯（さつ）と雲が懸（かか）って、大川が白くなったので、仲見世前まで腕車（くるま）で来て、あ

れから電車に乗ろうとしたが、いつもの雑沓（ざっとう）。急な雨の混雑はまた夥（おびただ）しい。江戸中の人を箱詰（はこづめ）にする体裁（ていたらく）。不見識なのはもちに捏（でっ）ちられた蝿の形で、窓にも踏台にも、べたべたと手足をあがいて附着（くッつ）く。

　電車は見る見る中に黒く幅ったくなって、三台五台、群衆を押離すがごとく雨に洗い落したそうに軋（きし）んで出る。それをも厭（いと）わない浅間しさで、児（こ）を抱いた洋服がやっと手を縋（すがっ）って乗掛（のっか）けた処を、鉄棒で払わぬばかり車掌の手で突離された。よろめくと帽子が飛んで、小児（こども）がぎゃっと悲鳴を揚げた。

　この発奮（はずみ）に、

「乗るものか。」

濡れるなら濡れろ、で、奮然として駈出（かけだ）したが。

仲見世から本堂までは、もう人気もなく、雨は勝手に降って音も寂寞（ひっそり）としたその中を、一思いに仁王門も抜けて、御堂（みどう）の石畳を右へついて廻廊の欄干を三階のように見ながら、廂（ひさし）の頼母（たのも）しさを親船の舳（みよし）のように仰いで、沫（しぶき）を避（よ）けつつ、吻（ほっ）と息。

濡れた帽子を階段擬宝珠（ぎぼし）に預けて、瀬多の橋に夕暮れた一人旅という姿で、茫然（ぼうぜん）としてしばらく彳（たたず）む。

……

風が出て、雨は冷々（ひやひや）として小留（おや）むらしい。

雫（しずく）で、不気味さに、まくっていた袖をおろして、しっとりとある襟を掻合（かきあわ）す。この陽気なればこそ、蒸暑ければ必定雷鳴が加わるのであった。

早や暮れかかって、ちらちらと点（とも）れる、灯の数ほど、ばらばら誰彼（たそがれ）の人通り。

話声がふわふわと浮いて、大屋根から出た蝙蝠（こうもり）のように目前に幾つもちらつくと、柳も見えて、樹立（こだち）も見えて、濃く淡く墨になり行く。

朝から内を出て、随分遠路（とおみち）を掛けた男は、不思議に遥々（はるばる）と旅をして、広野の堂に、一人雨宿りをしたような気がして、里懐かしさ、人恋しさに堪えやらぬ。

「訪ねてみようか、この近処だ。」

既に、駈込（かけこ）んで、一呼吸吐（ひといきつ）いた頃から、降籠（ふりこ）められた出前（でさき）の雨の心細さに、親類か、友達か、浅草辺に番傘一本、と思うと共に、ついそこに、目の前に、路地の出窓から、果敢（はか）ない顔を出して格子に縋（すが）って、此方（こなた）を差覗（さしのぞ）くような気がして、筋骨（すじぼね）も、ひしひしとしめつけられるばかり身に染みた、女の事が……こうした人懐しさにいや増（まさ）る。……

ここで逢うのは、旅路遥（はるか）な他国の廓（くるわ）で、夜更けて寝乱れた従妹（いとこ）にめぐり合って、すがり寄る、手の緋縮緬（ひぢりめん）は心の通う同じ骨肉の血であるがごとく胸をそ

そられたのである。抱えられた家も、勤めの名も、手紙のたよりに聞いて忘れぬ。

「可(よ)し。」

肩を揺(ゆす)って、一ツ、胸で意気込んで、帽子を俯向(うつむ)けにして、御堂の廂(ひさし)を出た。……

軽い雨で、もう面(おもて)を打つほどではないが、引緊(ひきし)めた袂(たもと)重たく、しょんぼりとして、九十九折(つづらおり)なる抜裏、横町。谷のドン底の溝(どぶ)づたい、次第に暗き奥山路(おくやまみち)。

六

時々足許から、はっと鳥の立つ女の影。……けたたましく、可哀（あわれ）に、心悲（うらがな）しい、鳶（とび）にとらるると聞く果敢（はか）ない蟬の声に、俊吉は肝を冷しつつ、※々（ぱっぱっ）［＃「火＋發」、269-9］と面（おもて）を照らす狐火（きつねび）の御神燈に、幾たびか驚いて目を塞（ふさ）いだが、路も坂に沈むばかり。いよいよ谷深く、水が漆（うるし）を流した溝端（どぶばた）に、茨（いばら）のごとき格子前（さき）、消えずに目に着く狐火が一つ、ぼんやりとして（蔦屋（つたや））とある。

「これだ。」

密（そっ）と、下へ屈（かが）むようにしてその御神燈を眴（みまわ）すと、他（ほか）

に小草（おぐさ）の影は無い、染次、と記した一葉（ひとは）のみ。で、それさえ、もと居たらしい芸妓（げいしゃ）の上へ貼紙（はりがみ）をしたのに記してあった。看板を書（か）きかえる隙（ひま）もない、まだ出たてだという、新しさより、一人旅の木賃宿に、かよわい女が紙衾（かみぶすま）の可哀さが見えた。

とばかりで、俊吉は黙って通過ぎた。

が、筋向うの格子戸の鼠鳴（ねずみなき）に、ハッと、むささびが吠（ほ）えたほど驚いて引返（ひっかえ）して、蔦屋の門を逆に戻る。

俯向（うつむ）いて彳（たたず）んでまた御神燈を覗（のぞ）いた。が、前刻（さっき）の雨が降込んで閉めたのか、框（かまち）の障子は引いてある。……そこに切張（きりばり）の紙に目隠しされて、あの女が染次か、

と思う、胸がドキドキして、また行過ぎる。
トあの鼠鳴がこっちを見た。狐のようで鼻が白い。
俊吉は取って返した。また戻って、同じことを四五度(たび)した。
いいもの望みで、木賃を恥じた外聞ではない。……巡礼の笈(おい)に国々の名所古跡の入ったほど、いろいろの影について廻った三年ぶりの馴染(なじみ)に逢う、今、現在、ここで逢うのに無事では済むまい、——お互に降って湧(わ)くような事があろう、と取越苦労の胸騒(むなさわぎ)がしたのであった。
「御免。」

と思切って声を掛けた時、俊吉の手は格子を圧（おさ）えて、そして片足遁構（にげがま）えで立っていた。

「今晩は。」

「はい、今晩は。」

と平べったい、が切口上で、障子を半分開けたのを、孤家（ひとつや）の婆々（ばばあ）かと思うと、たぼの張った、脊の低い、年紀（とし）には似ないで、頸（くび）を塗った、浴衣の模様も大年増。

これが女房とすぐに知れた。

俊吉は、ト御神燈の灯を避（よ）けて、路地の暗い方へ衝（ツッ）と身を引く。

白粉（おしろい）のその頸を、ぬいと出額（おでこ）の下の、小慧（こざか）しげに、

世智辛く光る金壺眼（かなつぼまなこ）で、じろりと見越して、
「今晩は。誰方様（どなたさま）で？」
「お宅に染次ってのは居（お）りますか。」
「はい居りますでございますが。」
と立塞（たちふさ）がるように、しかも、遁（にが）すまいとするように、框（かまち）一杯にはだかるのである。
「ちょっとお呼び下さいませんか。」
ああ、来なければ可（よ）かった、奥も無さそうなのに、声を聞いて出て来ないくらいなら、とがっくり泥濘（ぬかるみ）へ落ちた気がする。
「唯今（ただいま）お湯へ参ってますがね、……まあ、貴方（あなた）。」と金

壺眼はいよいよ光った。
「それじゃまた来ましょう。」
「まあ、貴方。」
風体を見定めたか、慌（あわただ）しく土間へ片足を下ろして、
「直（じ）きに帰りますから、まあ、お上んなさいまし。」
「いや、途中で困ったから傘を借りたいと思ったんですが、もう雨も上りましたよ。」
「あら、貴方、串戯（じょうだん）じゃありません。私が染ちゃんに叱られますわ、お帰し申すもんですかよ。」

「相合傘でいらっしゃいまし、染ちゃん、嬉しいでしょう、えへへへへ、貴方、御機嫌よう。」

と送出した。……

傘（からかさ）は、染次が褄（つま）を取ってさしかける。

「可厭（いや）な嬶々（かかあ）だな。」

「まだ聞えますよ。」

と下へ、袂（たもと）の先をそっと引く。

それなり四五間、黙って小雨の路地を歩行（ある）く、……

俊吉は少しずつ、…やがて傘の下を離れて出た。

「濡れますよ、貴方。」

男は黙然（だんまり）の腕組して行（ゆ）く。

「ちょっと、濡れるわ、お前さん。」

やっぱり暗い方を、男は、ひそひそ。

「濡れると云うのに、」

手は届く、羽織の袖をぐっと引いて突附けて、傘（からかさ）を傾けて、

「邪慳（じゃけん）だねえ。」

「泣いてるのか、何だな、大（おおき）な姉さんが。」

「……お前さん、可懐（なつか）しい、恋しいに、年齢（とし）に加減はありませんわね。」

「何しろ、お前、……こんな路地端（ろじばた）に立ってちゃ、しょ

うがない。」

「ああ、早く行きましょう。」

と目を蔽(お)うていた袖口をはらりと落すと、瓦斯(がす)の遠灯(とおあかり)にちらりと翻(かえ)る。

「少(わか)づくりで極(きま)りが悪いわね。」

と褄を捌(さば)いて取直して、

「極(きまり)が悪いと云えば、私は今、毛筋立を突張(つっぱ)らして、薄化粧は可(い)いけれども、のぼせて湯から帰って来ると、染ちゃんお客様が、ッて女房(おかみ)さんが言ったでしょう。内へ来るような馴染(なじみ)はなし、どこの素見(ひやかし)だろうと思って、おやそうか何か気の無い返事をして、手拭(てぬぐい)を

掛けながら台所口（だいどころぐち）から、ひょいと見ると、まあ、お前さんなんだもの。真赤（まっか）になったわ。極（きまり）が悪くって。」

「なぜだい。」

「悟られやしないかと思ってさ。」

「何を？……」

「だって、何をッて、お前さん、どこか、お茶屋か、待合からかけてくれれば可いじゃありませんか、唐突（だしぬけ）に内へなんぞ来るんだもの。」

「三年越（ごし）だよ、手紙一本が当（あて）なんだ。大事な落しものを捜すような気がするからね、どこかにあるには違いないが、居るか居ないか、逢えるかどうか分りやしな

い。おまけに一向土地不案内で、東西分らずだもの。茶屋の広間にたった一つ膳（ぜん）を控えて、待っていて、そんな妓（こ）は居（お）りません。……居ますが遠出だなんぞと来てみたが可い。御存じの融通（ゆずう）が利かないんだから、可（よし）、ついでにお銚子（ちょうし）のおかわりが、と知らない女を呼ぶわけにゃ行かずさ、瀬ぶみをするつもりで、行ったんだ。もっともね、居ると分ったら、門口（かどぐち）から引返（ひっかえ）[#ルビの「ひっかえ」は底本では「ひっかへ」]して、どこかで呼ぶんだっけ。媽々（かかあ）が追掛（おっかけ）るじゃないか。仕方なし奥へ入ったんだ。一間（ひとま）しかありやしない。すぐの長火鉢の前に媽々は控えた、顔の遣場（やりば）もなしに、しょびたれて

おりましたよ、はあ。

光った旦那じゃなし、飛んだお前の外聞だっけね、済まなかったよ。」

「あれ、お前さんも性悪（しょうわる）をすると見えて、ひがむ事を覚えたね。誰が外聞だと申しました、俊さん、」

取った袂に力が入って、

「女房（おかみ）さんに、悟られると、……だと悟られると、これから逢うのに、一々、勘定が要るじゃありませんか。おまいりだわ、お稽古だわッて内証（ないしょ）で逢うのに出憎いわ。

はじめの事は知ってるから私の年が年ですからね。

主人の方じゃ目くじらを立てていますもの、——顔を見られてしまってさ……しょびたれていましたよ、はあ。——お前の外聞だっけね、済まなかった。……誰が教えたの。」

とフフンと笑って、

「素人だね。」

八

「……わざと口数も利かないで、一生懸命に我慢をしていた、御免なさいよ。」

声がまた悄（しお）れて沈んで、
「何にも言わないで、いきなり噛（かじ）りつきたかったんだけれど、澄し返って、悠々と髪を撫着（なでつ）けたりなんかして。」
「行場（ゆきば）がないから、熟々（しみじみ）拝見をしましたよ、……眩（まぶ）しい事でございました。」
「雪のようでしょう、ちょっと片膝立てた処なんざ、千年ものだわね、……染ちゃん大分御念入だねなんて、いつもはもっと塗れ、もっと髱（たぼ）を出せと云う女房（おかみ）さんが云うんだもの。どう思ったか知らないけれど、大抵こんがらかったろうと私は思うの。

そりゃ成りたけ、よくは見せたいが弱身だって、その人の見る前じゃあねえ、……察して頂戴。私はお前さんに恥かしかったわ、お乳なんか。」

と緊められるように胸を圧えた、肩が細りとして重そうなので、俊吉が傘を取る、と忘れたように黙って放す。

「いいえ、結構でございました、湯あがりの水髪で、薄化粧を颯と直したのに、別してはまた緋縮緬のお襦袢を召した処と来た日にゃ。」

「あれさ、止して頂戴……火鉢の処は横町から見通しでしょう、脱ぐにも着るにも、あの、鏡台の前しかな

いんだもの。……だから、お前さんに壁の方を向いて下さいと云ったじゃありませんか。」

「だって、以前は着ものを着たより、その方が多かった人じゃないか、私はちっとも恐れやしないよ。」

「ねえ……ほほほ。……」

笑ってちょっと口籠って、

「ですがね、こうなると、自分ながら気が変って、お前さんの前だと花嫁も同じことよ。……何でしたっけね、そら、川柳とかに、下に居て嫁は着てからすっと立ち……」

「お前は学者だよ。」

「似てさ、お前さんに。」

「大きにお世話だ、学者に帯を〆(し)めさせる奴があるもんか、おい、……まだ一人じゃ結べないかい。」

「人、……芸者の方が、ああするんだわ。」

「勝手にしやがれ。」

「あれ。」

「ちっとやけらあねえ。」

「溝(どぶ)へ落っこちるわねえ。」

「えへん！」

と怒鳴って擦違いに人が通った。早や、旧来(もと)た瓦斯(がす)に頬冠(ほおかむ)りした薄青い肩の処が。

「どこだ。」

「一直(いちなお)の塀の処だわ。」

直(じ)きその近所であった。

「座敷はこれだけかね。」

と俊吉は小さな声で。

「もう、一間ありますよ。」

と染次が云う。……通された八畳は、燈(あかり)も明(あかる)し、ぱっとして畳も青い。床には花も活(い)って。山家を出たような俊吉の目には、博覧会の茶座敷を見るがごとく感じられた。が、入る時見た、襖一重(ふすまひとえ)が直ぐ上框(あがりかまち)兼帯の茶の室で、そこに、髷(まげ)に結(い)った娑婆気(しゃばき)なのが、と

膝を占めて構えていたから。

話に雀ほどの声も出せない。

で、もう一間と眴（みまわ）すと、小庭の縁が折曲りに突当りが板戸になる。……そこが細目にあいた中に、月影かと見えたのは、廂（ひさし）に釣った箱燈籠（はこどうろう）の薄明りで、植込を濃く、むこうへぼかして薄（うっす）りと青い蚊帳（かや）。

ト顔を見合せた。

急に二人は更（あらたま）ったのである。

男が真中（まんなか）の卓子台（ちゃぶだい）に、肱（ひじ）を支（つ）いて、

「その後（のち）は。どうしたい。」

「お話にならないの。」

と自棄に、おくれ毛を揺ったが、……心配はさせない、と云う姉のような呑込んだ優い微笑。

九

「失礼な、どうも奥様をお呼立て申しまして済みません。でも、お差向いの処へ、他人が出ましてはかえってお妨げ、と存じまして、ねえ、旦那。」

と襖越に待合の女房が云った。

ぴたりと後手にその後を閉めたあとを、もの言わぬ応答にちょっと振返って見て、そのまま片手に茶道

具を盆ごと据えて立直って、すらりと蹴出(けだ)しの紅(くれない)に、明石の裾を曳(ひ)いた姿は、しとしとと雨垂れが、子持縞(こもちじま)の浅黄に通って、露に活(い)きたように美しかった。

「いや。」

とただ間拍子(まびょうし)もなく、女房の言いぐさに返事をする、俊吉の膝へ、衝(つ)と膝をのっかかるようにして盆ごと茶碗を出したのである。

茶を充満(いっぱい)の吸子(きびしょ)が一所に乗っていた。

これは卓子台(ちゃぶだい)に載(の)せると可(よ)かった。でなくば、もう少し間(なか)を措(お)いて居(すわ)れば仔細(しさい)なかった。もとから芸妓(げいしゃ)だと離れたろう。前(さき)の遊女(おいらん)は、身を寄せるのに馴(な)れた。

しかも披露目（ひろめ）の日の冷汗を恥じて、俊吉の膝に俯伏（うつぷ）した処を、（出ばな。）と呼ばれて立ったのである。……

お染はもとの座へそうして近々と来て盆ごと出しながら、も一度襖越しに見返った。名ある女を、こうはいかに、あしらうまい、――奥様と云ったな――膝に縋（すが）った透見（すきみ）をしたか、恥と怨（うらみ）を籠めた瞳は、遊里（さと）の二十（はたち）の張（はり）が籠（こも）って、熟（じっ）と襖に注がれた。

ト見つつ夢のようにうっかりして、なみなみと茶をくんだ朝顔形（なり）の茶碗に俊吉が手を掛ける、とコトリと響いたのが胸に通って、女は盆ごと男が受取ったと思ったらしい。ドンと落ちると、盆は、ハッと持直そ

うとする手に引かれて、俊吉の分も浚った茶碗が対。吸子も共に発奮を打ってお染は肩から胸、両膝かけて、ざっと、ありたけの茶を浴びたのである。むらむらと立つ白い湯気が、崩るる褄の紅の陽炎のごとく包んで伏せた。

頸を細く、面を背けて、島田を斜に、

「あっ。」と云う。

「火傷はしないか。」と倒れようとするその肩を抱いた。

「どうなさいました。」と女房飛込み、この体を一目見るや、

「雑巾々々。」と宙に躍って、蹴返す裳に刎ねた脚は、

ここに魅（さ）した魔の使（つかい）が、鴨居（かもい）を抜けて出るように見えた。

女の袖つけから膝へ湛（たま）って、落葉が埋（うず）んだような茶殻を掬（すく）って、仰向（あおむ）けた盆の上へ、俊吉がその手の雫（しずく）を切った時。

「可（よ）ござんすよ、可ござんすよ、そうしてお置きなさいまし、今私（わたくし）が、」

と言いながら白に浅黄を縁（へり）とりの手巾（ハンケチ）で、脇を圧（おさ）えると、脇。膝をずぶずぶと圧えると、膝を、濡れたのが襦袢を透（とお）して、明石の縞（しま）に浸（にじ）んでは、手巾にひたひたと桃色の雫を染めた。——

「ええ、私あの時の事を思出したの、短刀で、ここを切られた時、」……

と、一年おいて如月(きさらぎ)の雪の夜更けにお染は、俊吉の矢来の奥の二階の置炬燵(おきごたつ)に弱々と凭(もた)れて語った。

さてその夜は、取って返して、両手に雑巾を持って、待合の女房が顕(あらわ)れたのに、染次は悄(しお)れながら、羅(うすもの)の袖を開いて見せて、

「汚点(しみ)になりましょうねえ。」

「まあ、ねえ、どうも。」

と伸上ったり、縮んだり。
「何しろ、脱がなくッちゃお前さん、直き乾くだけは乾きますからね……あちらへ来て。さあ——旦那、奥様のお膚(はだ)を見ますよ、済みませんけれど、貴下(あなた)が邪慳(じゃけん)だから仕方が無い。……」
俊吉は黙って横を向いた。
「浴衣と、さあ、お前さん、」
と引立てるようにされて、染次は悄々(しおしお)と次に出た。
……組合の気脈(きみゃく)が通(かよ)って、待合の女房も、抱主(かかえぬし)が一張羅(いっちょうら)を着飾らせた、損を知って、そんなに手荒にするのであろう、ああ。

十

「大丈夫よ……大丈夫よ。」

「飛んだ、飛んだ事を……お前、主人にどうするえ。」

「まさか、取って食おうともしませんから、そんな事より。」

と莞爾(にっこり)した、顔は蒼白(あおじろ)かったが、しかしそれは蚊帳の萌黄(もえぎ)が映ったのであった。

帰る時は、効々(かいがい)しくざっと干したのを端折(はしょ)って着ていて、男に傘を持たせておいて、止せと云うに、小雨

の中をちょこちょこ走りに自分で俥（くるま）を雇って乗せた。

　蛇目傘（じゃのめ）を泥に引傾（ひっかた）げ、楫棒（かじぼう）を圧（おさ）えぬばかり、泥除（どろよけ）に縋（すが）って小造（こづくり）な女が仰向（あおむ）けに母衣（ほろ）を覗（のぞ）く顔の色白々と、

「お近い内に。」

「…………」

「きっと？」

「むむ。」

「きっとですよ。」

　俊吉は黙って頷（うなず）いた。

　暗くて見えなかったろう。

「きっとよ。」

「分ったよ。」
「可ござんすか。」
「煩い。」と心にもなく、車夫の手前、宵から心遣いに疲れ果てて、ぐったりして、夏の雨も寒いまでに身体もぞくぞくする癇癪まぎれに云ったのを、気にも掛けず、ほっと安心したように立直ったたと思うと、
「車夫さん、はい――……あの車賃は払いましたよ。」
「有るよ。」
「威張ってさ、それから少しですが御祝儀。気をつけて上げて下さいよ、よくねえ、気をつけて、可ござんすか。」

「大丈夫でございますよ、姉さん。」と楫（かじ）［＃ルビの「かじ」は底本では「かぢ」］を取った片手に祝儀を頂きながら。

「でも遠いんですもの、道は悪し、それに暗いでしょう。」

「承合（うけあい）ましたよ。」

「それじゃ、お近いうち。」

影を引切（ひっき）るように衝（つ）と過ぎる車のうしろを、トンと敲（たた）いたと思うと夜の潮に引残されて染次は残ってしょんぼりと立つ。

車が路を離れた時、母衣の中とて人目も恥じず、俊

吉は、ツト両掌(りょうて)で面(おもて)を蔽(おお)うて、はらはらと涙を落した。

……

「でも、遠いんですもの、路は悪し、それに暗いでしょう。」

行方も知らず、分れるように思ったのであった。

そのまま等閑(なおざり)にすべき義理ではないのに、主人にも、女にも、あの羅(うすもの)の償(つぐない)をする用意なしには、忍んでも逢ってはならないと思うのに、あせって揉(もが)いても、半月や一月でその金子(かね)は出来なかった。

のみならず、追縋(おいすが)って染次が呼出しの手紙の端に、

——明石のしみは、しみ抜屋にても引受け申さず、こ

の上は、くくみ洗いをして、人肌にて暖め乾かし候よりせむ方なしとて、毎日少しずつふくみ洗いいたし候ては、おかみさんと私とにて毎夜添臥（そいぶし）※［＃「参候」のくずし字、284-1］。夜ごとにかわる何とかより針の筵（むしろ）に候えども、お前さまにお目もうじのなごりと思い候えば、それさえうつつ心に嬉しく懐しく存じ※［＃「参候」のくずし字、284-3］……

　ふくみ洗いで毎晩抱く、あの明石のしみを。行かれるものか、素手で、どうして。

　秋の半ばに、住（すみ）かえた、と云って、ただそれだけ、上州伊香保から音信（たより）があった。

やがてくわしく、と云うのが、そのままになった――

――今夜なのである。

俊吉は捗取（はかど）らぬ雪を踏（ふみ）しめ踏しめ、俥（くるま）を見送られた時を思出すと、傘も忘れて、降る雪に、頭（つむり）を打たせて俯向（うつむ）きながら、義理と不義理と、人目と世間と、言訳なさと可懐（なつか）しさ、とそこに、見える女の姿に、心は暗（やみ）の目は懜（ぼう）として白い雪、睫毛（まつげ）に解けるか雫（しずく）が落ちた。

十一

「……そういったわけだもの、ね、……そんなに怨む

もんじゃない。」

襦袢一重の女の背(せな)へ、自分が脱いだ絣(かすり)の綿入羽織を着せて、その肩に手を置きながら、俊吉は向い合いもせず、置炬燵(おきごたつ)の同じ隅に凭(もた)れていた。

内へ帰ると、一つ躓(つまず)きながら、框(かまち)へ上って、奥に仏壇のある、襖(ふすま)を開けて、そこに行火(あんか)をして、もう、すやすやと寐(ね)た、撫(な)つけの可愛らしい白髪(しらが)と、裾(すそ)に解きもののある、女中の夜延(よなべ)とを見て、密(そっ)とまた閉めて、ずかずかと階子(はしご)を上(あが)ると、障子が閉って、張合の無さは、燈(あかり)にその人の影が見えない。

で、嘘だと思った。

ここで、トボンと夢が覚めるのであろう、と途中の雪の幻さえ、一斉に消えるような、げっそり気の抜けた思いで、思切って障子を開けると、更紗を掛けた置炬燵の、しかも机に遠い、縁に向いた暗い中から、と黒髪が揺めいて、窶れたが、白い顔。するりと緋縮緬の肩を抽いたのは夢ではなかったのである。

「どうした。」

と顔を見た。

「こんな、うまい装をして、驚いたでしょう。」

と莞爾する。

「驚いた。」

とほっと呼吸（いき）して、どっか、と俊吉は、はじめて瀬戸ものの火鉢の縁（へり）に坐ったのである。

「ああ、座蒲団（ざぶとん）はこっち。」

と云う、背中に当てて寝ていたのを、ずらして取ろうとしたのを見て、

「敷いておいで、そっちへ行こう、半分ずつ、」

と俊吉はじめて笑った。……

お染は、上野の停車場から。――深川の親の内へも行（ゆ）かずに――じかづけに車でここへ来たのだと云う。

……神楽坂は引上げたが、見る間に深くなる雪に、もう郵便局の急な勾配で呼吸（いき）ついて、我慢にも動いてく

れない。仕方なしに、あれから路（みち）の無い雪を分けて、矢来の中をそっちこっち、窓明りさえ見れば気兼（きがね）をしいしい、一時（ひととき）ばかり尋ね廻った。持ってた洋傘（こうもり）も雪に折れたから途中で落したと云う。それは洲崎を出る時に買ったままの。憑（つ）きもののようだ、と寂しく笑った。

俊吉は、卍（まんじ）の中を雪に漾（ただよ）う、黒髪のみだれを思った。

女中が、何よりか、と火を入れて炬燵に導いてから、出先へ迎いに出たあとで、冷いとだけ思った袖も裙（すそ）も衣類（きもの）が濡れたから不気味で脱いだ、そして蒲団の下へ掛けたと云う。

「何より不気味だね、衣類（きもの）の濡れるのは。……私、聞いても悚然（ぞっと）する。……済まなかった。お染さん。」

女はそこで怨んだ。

帰る途（みち）すがらも、真実の涙を流した言訳を聞いて、暖い炬燵の膚（はだ）のぬくもりに、とけた雪は、斉（ひと）しく女の瞳に宿った。その時のお染の目は、大（おおき）く睜（みは）られて美しかった。

「女中（ねえ）さんは。」

「女中か、私はね、雪でひとりでに涙が出ると、茫（ぼ）っと何だか赤いじゃないか。引擦（ひっこす）ってみるとお前、つい先へ提灯（ちょうちん）が一つ行くんだ。やっと、はじめて雪の上に、

こぼこぼ下駄のあとの印いたのが見えたっけ。風は出たし……歩行き悩んだろう。先へ出た女中がまだそこを、うしろの人足も聞きつけないで、ふらふらして歩行いているんだ。追着いてね、使がこの使だ、手を曳くようにして力をつけて、とぼとぼ遣りながら炬燵の事も聞いたよ。

しんせつついでだ、酒屋へ寄ってくれ、と云うと、二つ返事で快く引受けたから、図に乗ってもう一つ狐蕎麦を［#「狐蕎麦」は底本では「孤蕎麦」］誂えた。」

「上州のお客にはちょうど可いわね。」

「嫌味を云うなよ。……でも、お前は先から麺類を

断(た)ってる事を知ってるから、てんのぬきを誂えたぜ。」

「まあ、嬉しい。」

と膝で確(しっか)りと手を取って、

「じゃ、あの、この炬燵の上へ盆を乗せて、お銚子をつけて、お前さん、あい、お酌って、それから私も飲んで。」

と熟(じっ)と顔を見つつ、

「願(ねがい)が叶(かな)ったわ、私。……一生に一度、お前さん、とそうして、お酒が飲みたかった。ああ、嬉しい。余り嬉しさに、わなわな震えて、野暮なお酌をすると口惜(くやし)い。稽古をするわ、私。……ちょっとその小さな

掛花活（かけはないけ）を取って頂戴。」
「何にする。」
「お銚子を持つ稽古するの。」
「狂人染（きちがいじ）みた、何だな、お前。」
「よう、後生だから、一度だって私のいいなり次第になった事はないじゃありませんか。」
「はいはい、今夜の処（とこ）は御意次第。」
そこが地袋で、手が直ぐに、水仙が少しすがれて、摺（ず）って、危（あや）うく落ちそうに縋（すが）ったのを、密（そっ）と取ると、羽織の肩を媚（なま）めかしく脱掛けながら、受取ったと思うと留める間もなく、ぐ、ぐ、と咽喉（のど）を通して一息に仰い

で呑んだ。

「まあ、お染。」

「だって、ここが苦しいんですもの、」

と白い指で、わなわなと胸を擦（さす）った。

「ああ、旨（おいし）かった。さあ、お酌。いいえ、毒なものは上げはしません、ちょっと、ただ口をつけて頂戴。花にでも。」

「ままよ。」……構わず呑もうとすると雫（しずく）も無かった。

花を唇につけた時である。

「お酒が来たら、何にも思わないで、嬉しく飲みたい。

……私、ほんとに伊香保では、酷（ひど）い、情（なさけ）ない目に逢っ

たの。

お前さんに逢って、皆(みんな)忘れたいと思うんだから、聞いて頂戴。……伊香保でね——すぐに一人旦那が出来たの。土地の請負師(うけおいし)だって云うのよ、頼みもしないのに無理に引かしてさ、石段の下に景ぶつを出す、射的(しゃてき)の店を拵(こしら)えてさ、そこに円髷(まるまげ)が居たんですよ。

この寒いのに、単衣(ひとえ)一つでぶるぶる震えて、あの……千葉の。先(せん)の呉服屋が来たんでしょう。可哀相でね、お金子(かね)を遣って旅籠屋(はたごや)を世話するとね、逗留(とうりゅう)をして帰らないから、旦那は不断女にかけると狂人(きちがい)のような嫉妬(やきもち)やきだし、相場師と云うのが博徒(ばくちうち)でね、命知らず

の破落戸（ならずもの）の子分は多し、知れると面倒だから、次の宿（しゅく）まで、おいでなさいって因果を含めて、……その時止（よ）せば可かったのに、湯に入ったのが悪かった。……帯を解いたのを見られたでしょう。

——染や、今日はいい天気だ、裏の山から隅田川が幽（かすか）に見えるのが、雪晴れの名所なんだ。一所に見ないかって誘うんですもの。

余り可懐（なつか）しさに、うっかり雪路（ゆきみち）を上（のぼ）ったわ。峠の原で、たぶさを取って引倒して、覚えがあろうと、ずるずると引摺（ひきず）られて、積った雪が摺（す）れる枝の、さいかちに手足が裂けて、あの、実の真赤（まっか）なのを見た時は、針

の山に追上げられる雪の峠の亡者か、と思ったんですがね。それから……立樹に結（ゆわ）えられて、……」

「お染。」

「短刀で、こ、ここところを、あっちこっち、ぎらぎら引かれて身体（からだ）一面に血が流れた時は、……私、その、たらたら流れて胸から乳から伝うのが、渇きの留（とま）るほど嬉しかった。莞爾莞爾（にこにこ）したわ。何とも言えない可（い）い心持だったんですよ。お前さんに、お前さんに、……あの時、――一面に染まった事を思出して何とも言えない、いい心持だったの。この襦袢です。斬（き）られたのは、ここだの、ここだの、」

と俊吉の瞶(みは)る目に、胸を開くと、手巾(ハンケチ)を当てた。見ると、顔の色が真蒼(まっさお)になるとともに、垂々(ぽたぽた)と血に染まるのが、溢(あふ)れて、わななく指を洩(も)れる。

俊吉は突伏(つっぷ)した。

血はまだ溢れる、音なき雪のように、ぼたぼたと鳴って留(や)まぬ。

カーンと仏壇のりんが響いた。

「旦那様、旦那様。」

「あ。」

と顔を上げると、誰も居ない。炬燵の上に水仙が落ちて、花活(はないけ)の水が点滴(したた)る。

俊吉は、駈下りた。

遠慮して段の下に立った女中が驚きながら、

「あれ、まあ、お銚子がつきましてございますが。」

俊吉は呼吸がはずんで、

「せ、せ、折角だっけ、……客は帰ったよ。」

と見ると、仏壇に灯が点いて、老人が殊勝に坐って、

御法の声。

「……　我常住於此　以諸神通力　令顚倒衆生
雖近而不見　衆見我滅度　広供養舎利　咸皆懐恋慕
而生渇仰心……」

白髪に尊き燈火の星、観音、そこにおはします。……

……駈寄って、はっと肩を抱いた。

「お祖母さん、どうして今頃御経を誦むの。」

慌てた孫に、従容として見向いて、珠数を片手に、

「あのう、今しがた私が夢にの、美しい女の人がござっての、回向を頼むと言わしった故にの、……悉しい事は明日話そう。南無妙法蓮華経。……広供養舎利　咸皆懐恋慕　而生渇仰心　衆生既信伏　質直意柔輭。……」

新聞の電報と、続いて掲げられた上州の記事は、ここには言うまい。俊吉は年紀二十七。

いかほ野やいかほの沼のいかにして

恋しき人をいま一見見む

大正三（一九一四）年一月

底本：「泉鏡花集成6」ちくま文庫、筑摩書房
　　1996（平成8）年3月21日第1刷発行
底本の親本：「鏡花全集　第十五巻」岩波書店
　　1940（昭和15）年9月20日発行
※誤植箇所の確認には底本の親本を用いました。
入力：門田裕志
校正：高柳典子
2007年2月11日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。